

# 研究はやつと始まつたばかり

——これを機に「初心に帰って」もうひとがんばり

丸山 尚子

はじめに

この度は、『手が育つ・子どもが育つ・生活をつくる』（京都法政出版 一九九二）が思いがけず榮譽ある賞を受賞致しまして、ふと初心の頃を思い出しました。

私が「手の労働」を研究テーマと決め、「手」について研究を始めたのは大学院修士課程一年の時でした。エンゲルスの「猿から人間になるに際しての労働の役割」を読み感激したのがきっかけでした。もう三十年以上も前のことです。

当時私は（今でもそうですが）、何事においても、「はじめに何があるのか」ということにとても興味があり、こだわっていました。これから自分が長いことつきあうことになるであろう「人間」は、どこから、どうしてやってきたのか、何が人間のはじまりだったのか、何によって発展・発達するのかを知りたがっていました。

そんな時出会ったのが、エンゲルスの論文でした。

当時いろんな意味で影響を受け、わたしの発達研

究の「原点」ともなった「ソビエト心理学」のとくに幼児関係の文献にしばしば登場する「手の労働」に心ひかれていたこともあって、私の関心は「手」と「手の労働」一色になりました。

卒論で、下肢に障害をもつ子どもたちや大人の私たちを対象にして、「足」について考えたことも、「手」にいきつくべき条件となっていたかもしれないません。

ともあれ、こうして始まった「手」の研究でしたが、その頃は、「手の労働」などということばはまだまだ珍しい時代でした。

『「手の操作」、手の動作』、『手の作業』とどう違うの？、「手の操作」じゃどうしてだめなの？」などと聞かれ往生したものでした。

第一自分自身はつきりわかっていないのですから、説明を聞いた方もわかるはずがありません。説明すればする程、かげんそんな顔をされたものでした。

「手の労働」ということは響きと新しさに自己満足していた面がないでもなかったように思います。「ソビエト心理学」や「ソビエト教育学」の文献をたよりにことばを整理し、理解することで精一杯でした。

やっとわかりかけた頃、「手でいろんなものをつくったり（つくる）、お手伝い等で仕事をしたり（はたらく）…する活動」といったら、「手だけではできないんじゃないの。だとしたら『目の労働』、『足の労働』もあるというわけ？」などといわれ、「うーん」。

とにかく、その度にしどろもどろになったものです。

「だめじゃないか、初歩の初歩があやふやじゃ」と、とくに「ことば」の使い方にきびしい松本金寿先生（一九八四年に逝去）には叱られてばかりでした。

しかし、今考えるとあの頃が一番真剣に勉強して

いたように思います。

### 多くの方に支えられて

はじめの数年（在仙台時代）は「手を使ってする活動と認識の発達の関係」について、幼児を対象に、実験の中で捉えることを主にしておりました。

やがて、一九六七年、徳島大学教育学部幼稚園教員養成課程に教員として就職、「保育」という日常場面での「手」や「手の労働」に関心を持たざるを得なくなりました。やっと徳島に慣れ、なじみができはじめた頃、保育所通いをはじめました。日常的な生活の場面での子どもの観察を通して、「手」の発達の過程を捉え直したいと思ったからでした。

ところが、しばらくして（一九七〇年代の初め）、ご存知のように、「子どもたちの手の異変」（不器用になった、手が虫歯にかかった等と表された）が多くの人たちによって指摘されました。やがて、足の問題や身体のおかしさ、それらと併せて指

摘された心の問題もありました。

「手」の発達課程を捉えるのみでなく、「手」を育てる課題が切実な問題意識となったのはその頃からでした。

生活を支え、生活をつくりだす「手」という視点から「手」を見直したい、そうした「手」こそ、子どもたちに育てなければならない「手」なのではないか。その「手」は、やがて、子どもたちのところを育て、生き方を支え、生き方をつくりだすのだと考えたのでした。

ちょうど発足したばかりの「子どもの遊びと手の労働研究会」に入会（一九七三年頃）、間もなくして保母さんたちとの「研究会」（「とくしま手の労働研究会」、一九七八年秋発足）もでき、保母さんたちによる「保育」との共同研究体制ができあがりました。

やっと、本格的な「手」、「手の労働」の研究のはじまりでした。

月一回の研究例会は楽しく、多芸多才な保母さんたちに圧倒されながらの日々の中、いくつかの成果（注①・②・③）も出すことができ、充実した中で研究をすすめることができました。

思えば本当に多くの方々にご指導とお世話をいただきました。とくに恩師の松本金寿先生、宮川知彰先生、共同研究者の近藤隆子さん、そして保育の場から多くのヒントを提供して下さりながら、実際に保育の場で実践して下さった「とくしま手の労働研究会」（現在「もみじの会」）のみんな、本当にありがとうございます。これを機会に、感謝申し上げます。

### 子どもたちにも感謝

またこの機会に実験や観察、保育に際し、協力してくれた多くの子どもたちにも感謝しなければなりません。子どもたちの協力がなければ私の研究は成り立ちませんでしたから。

その子どもたちの中には、わが家の娘たちもいます。

私の「手」の発達の研究に、少なからぬヒントを提供してくれたのは、わが家の三人の娘たちでした。

実験の開始前はもちろん、真つ最中にも、家に帰ると、「実験の材料はこれでいいか」、「どんな道具がいいか」、「観察のポイント？」等々まだ小さかった娘たちを相手に、ああでもないこうでもないとしてみたものでした。

ビデオもたくさん撮りました。記録もいやという程とりました。

いい道具（はさみやナイフ等）やおもしろい玩具を探して、あちこちの文房具屋さんや金物屋さん、おもちゃ屋さんをたずね歩き、おもしろそうな玩具やこれぞと思う道具を見つけると、さっそく買って帰っては子どもたちと夢中になって（夢中になったのは私だけだったかも）使って遊んだものです。<sup>(4)</sup>

子どもたちからの宿題

——娘たちの質問にも答えられなくて

そんな母親の姿を見て、不思議に思ったのでしょうか、ある日、長女が（確か五、六歳の頃だったと思います）

「おかあさん、おかあさんのおしごとはいがくのせんせいでしょう？　どんなおべんきょうをおしえているの？」と聞いてきました。

「おててのおべんきょうよ」と答えると、長女は、「ふうん」といいながら自分の手を見ていました。

「そのおててがね、どのようにして、おおきくなるのかなあとか、どうしたら、かしこいおててになるのかなあとかね」というと、長女は、

「そんなことかたんかんたん。ごはんをたくさんたべればいい、それからおててのたいそうをする」といいました。

「それもいいね、だけでもっとたいせつなのはね、しっかりおててをつかってあそぶこと。それからお

てつだいもしないとね。おかたづけをしたり。」

「おてつだいたら、どうして、おててがおおきくなるの？」

「おててはね、まいにちいっしょうけんめいつかうとおおきくなるの」

「ふうん、よくわかんない」

やがて小学生になり、わが家においてある手の絵本や子ども向けの手の本、手の進化の漫画等を片っ端から読みだした長女が小学校二年生になって間もない頃、「手のことはわかるけど、おさるさんがでてくるところがさっぱりわかんない」といって聞きにきました。

私は待ってましたとばかりに、手の大切さや仕組み、そして手の由来について得意になって話しました。いつか自分の子どもたちに、手の話をするのが夢だったその頃の私は、思いきり熱弁をふるったのはもちろんのことです。

私の話に上の二人は興味をもち、いろんな質問を  
してきました。

「指は五本と誰が決めたの？」

「お兄さん指よりお母さん指が短いのは、なんで？」

「この間行った動物園のおさるさんも、もうすこし  
したら二本足で歩けるようになるの？」 などなど  
..

ところが、突っ込みのするどい次女（当時小一）  
がいきなり、

「お母さんの子どもの頃にはしっぽがまだ残ってる  
人やまだしっかり立てないような人とかがたくさん  
いたん？」と聞いてきました。「大昔」の意味がま  
だまだ飲み込めなかったようです。

いくら説明しても「わかんない」。

これにはすっかりまいってしまいました。

彼女たちに納得のいく説明がつかないままに、そ  
の時も終わってしまいました。

そんなことから、いつの日にか、彼女たちも含め  
て子どもたち（小・中学生）に納得のいくように手  
について語る本を書かねばと思うようになりました。  
手のいろんなことの説明ができるような、さら  
には、手が人間をつくり、手が人間らしい生活の基  
となるのだということ、その「手」を育てるのは、  
お手伝いをしたり、友だちとたっぷり遊んだりの、  
ごく普通の楽しい毎日の生活であること、その中  
で、「手」だけではなく、こころも豊かに、足も腰  
も丈夫に、全身を育てることが大切であること、こ  
うして育った手が、人間らしい生活をおくり、自立  
的に生きるもとなるのだということを伝えたいと  
思ったのです。

なによりも、「手を育てる」主体である子ども自  
身に精一杯伝えたい、そう思ったのでした。

これは子どもたちから課された宿題のように思え  
ました。

これからのこと

——子どものための「手の本」が書ける日まで

しかし、幾度か思い立ちながら、未だに果たせな  
いままです。子どもたちと真っ向から対するにはま  
だまだ未熟、見すかれそう、もっと深めねば……と  
思ううちに日がたってしまいました。

一つのこと打ち込んだといえは聞こえはいいの  
ですが、要するにこれしかできなかったのです。し  
かもほんの入り口のところにとどりついただけ。実  
際のところ、研究はいまやと始まったばかりなの  
です。

もう一息、がんばらねば。文字通り「初心に帰っ  
て」励まねばと思います。そしていつの日か子ども  
たちからの宿題をはたすことができたらと思いま  
す。それは、はたして、いつのことになるのでしょ  
うか。

さて、「手」に関する研究についてを中心に述べ  
てきましたが、その周辺の問題として「子どもたち  
の生活」も大切です。

私は、「手の異変」が指摘されて間もない一九七  
五年、共同研究者とともに、徳島の子どもたち約七  
千名を対象に「生活実態調査」を実施しました。そ  
の後、ほぼ十年毎に、生活の実態調査を行っていま  
すが、この度（一九九三、一九九五年）、三回目の  
調査を実施しました。

『手が育つ・子どもが育つ・生活をつくる』では、  
一回目（一九七五年）と二回目（一九八三年）の結  
果とその間の変化を、「生活をつくる」（Ⅲ部）とし  
て紹介させていただきます。<sup>(5)</sup>

現在三回目の調査の集計・分析の真っ最中です。  
今回の調査では、一回目の調査において小学生だっ  
た「徳島の子どもたち」と、「お母さん」として約  
二十年ぶりに再会することになります。いろんな意  
味で感慨深い三回目の調査ですが、二十年間の生活

の軌跡を捉えることができたと思っています。

この仕事が一段落したら、再び「手」に直接関わる研究に復帰する予定です。

この年齢になって、やっと人並に、「初心に帰る」ことができるような感動を覚えました。

通常、受賞は、「よくがんばりました」、「よくできました」という意味です。

しかし、私の場合は、「もうひとがんばりしよう」、「もうひと仕事しよう」という意味と受けとめさせていただきたいと思っています。なにかこつけてはさばりたい私にとって、ガッンと大きな一発ともなり、大変大きな励みともなりました。

最後になりましたが、会長の岡田先生をはじめ日本保育学会の皆さまに、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

(徳島大学)

注

(1) 丸山尚子、とくしま「手の労働」研究会編 一九八四

『手で考える』 黎明書房

(2) 同右 一九八四 『0、5歳児の手を育てるカリキュラム』 黎明書房

(3) 子どもの遊びと手の労働研究会編 一九八六 『あそ

ぶ手・つくる手・はたらく手』 ミネルヴァ書房

(4) そんな中で、「はさみ」についてまとめたものが「はさみに挑戦」(『手で考える』に所収 249-262

頁)。

(5) 詳細は丸山尚子他 一九七七(一九八七に改訂)

『徳島の子どもたち』・一九八七 『はばたけ子どもた

ち・徳島の子どもたち・Part 2』共に第一出版。